新吉原へと客の流れが移り急増したことで、柳橋は地の利を得ることになる。新吉原へ向かう道順として、大川を猪牙舟で北上して山谷堀の奥で舟を降り、そこから歩くルートが流行り、柳橋に船宿が増えたのだ。船宿は更に宴席を兼ねるようになり、近隣には料亭や酒楼が林立して柳橋は花街として栄えた。柳橋には時代も味方した。天保の改革の取締りによって深川が衰退して辰巳芸者が柳橋に移り、柳橋芸者と言われたのだ。柳橋芸者は芸を重んじ、江戸の粋を体現する水準の高さが評判だった。

●ソメイヨシノ（花見酒）

私たちが見ているソメイヨシノは、全てが接木・挿木で育つクローンである。それ故に同じ気温で開花し、桜前線のニュースが流れる。通説ではソメイヨシノは、幕末に江戸染井村（豊島区駒込）の植木職人らによって売り出されたとされる。辞書を調べても同じで、「交配した」ではなく「売り出された」なのである。調べるうちに、ある放送局記者の調査記事に行き当たった。染井村の最初の一本が人為的に交配されたのか、それとも自然にできたのか起源や由来は謎のようだ。ソメイヨシノが、オオシマザクラとエドヒガンの品種がかけ合わされて誕生したことを踏まえ、では「エドヒガンとオオシマザクラを交配するとソメイヨシノになるのか」という交配実験を重ねている研究所があるという。全ゲノム解析（すべてのＤＮＡ配列を読み解く）から、どんな結果が出るのか楽しみだ。

●浄瑠璃と義太夫節（寝床）

邦楽の分類名称は難しい。江戸時代は義太夫節を義太夫と言うように「節」を省略することも多く、さらにややこしい。浄瑠璃は三味線音楽を伴った語り物の総称で、三味線音楽は流派が多数あった。語り物自体は三味線導入以前から存在したが琵琶と合わせることが多く、三味線と合わせるようになったのは江戸時代からだ。三味線の導入から、浄瑠璃は一層盛んになった。戦争がなくなり文化を担う人々や楽しむ人々が増えたことも一因だろう。歌舞伎や人形劇などを盛り上げる音曲として、都市だけでなく全国各地で歓迎された。義太夫節は浄瑠璃そのものと思われがちだが、浄瑠璃の一派を指す。創始者・竹本義太夫の節回しという意味で、義太夫節と呼ぶ。低音の力強い太棹三味線を大きめの撥で演奏し、近松門左衛門の作品を語ったことで人気を博し、発展したのである。

次回予告

第 670 回 日本橋劇場（中央区立日本橋公会堂）にて。

4月25日〈木〉よる5時30分開場／6時00分開演

八五郎坊主 ◉ 桂　米輝
五月幟 ◉ 柳亭市馬
陸奥間違い ◉ 三遊亭兼好
不孝者 ◉ 入船亭扇橋
つる ◉ 柳家權太楼

公演予定　5月21日〈火〉/6月25日〈火〉/7月29日〈月〉/8月17日〈土〉

▣ 当世噺家気質　その253・春風亭柳橋と「干物箱」

今年1月に亡くなった九代目春風亭小柳枝（1936～2024年）は、落語芸術協会（通称「芸協」）では古典派の大看板だった。あの独特の歌い上げるような名調子で、トントンとスピーディーに演じれば、誰も振り向かないような地味な噺でも、陽気で華やかなネタに生まれ変わった。だから、芸協の後輩たちは競うように小柳枝に稽古を願った。

「一時、うちの協会の若手は、ほとんど全員と言っていいくらい、小柳枝師匠に何かしら教わっていたなあ。ある時、若手の会に助演でやってきた小柳枝師匠がネタ帳を見たら、自分が教えたネタのオンパレード。『何だ、俺のやるネタがねーじゃねえか』とぼやいてました」

そう言って懐かしそうな顔をする当代春風亭柳橋も、「小柳枝学校」の生徒だった。

「私の師匠・七代目柳橋（1935～2004年）の振出しは三代目桂三木助だったでしょ。三木助のところの弟子は『寿限無』『たらちね』『初天神』の順で教わるのが決まりでした。私もその三席を覚えたら、『これからは外で稽古しろ。まずは小柳枝さんのところへ行ってこい』って」

その時、「『10時に来い』と言われて、10時に行ったってダメだ。1時間前に行って、おかみさんの手伝いをするんだ」と師匠から厳しく言われた。その言葉通りに、約束よりかなり早く小柳枝宅を訪ねたら、まだ寝ていた。寝ぼけ眼の小柳枝は先代柳橋の教えを聞いて苦笑いした。

「本当はそうなんだけど・・・、俺んとこは（時間通りで）いいんだよ」

小柳枝の稽古は丁寧で、高座さながらに2回続けて演じてくれる。ありがたいやら、申し訳ないやら。

「ところが、家に帰って録音テープを聴くと、師匠はものすごく早口なんですよ。対面で聴いてると全然気にならないのに、テープで再生すると早い早い。回転を落とさないと聞き取れないぐらいなんです」

そんな稽古を何度繰り返したか。小柳枝は当代柳橋には本当に親切だった。

「俺はな、そっちの師匠（先代柳橋）から商売になるネタをたくさんいただいた。だから弟子のお前には全部返さなきゃと思っているんだ」

得意にしていた「干物箱」も、稽古を願ったら二つ返事で教えてくれた。若旦那が本屋の善公のボロ家を訪ねて身代わりを頼む時のテンポの良いやりとり、若旦那の部屋にこもって妄想に耽る善公の弾けぶりなど、心地よい音楽を聴いているようだった。

芸協のバンド「アロハマンダラーズ」でも一緒になった。ボーカル&ウクレレの小柳枝が歌う「君といつまでも」が忘れられない。

「小柳枝師匠は高座でもバンドでも、見事に歌っていたんですね」

後年、「お前は先代の弟子なのに十八番の『崇徳院』をなぜやらないんだ。いつでもうちに来い」と言われていたが、小柳枝が倒れ、稽古は叶わなかった。それが心残りだという。

（長井好弘）

第六百六十九回

落語研究会

日時●令和六年三月二十九日《金》よる六時開演

会場●日本橋劇場（中央区立日本橋公会堂）

主催●ＴＢＳテレビ

《演目》

恪気の独楽● 三遊亭歌彦

普段の袴● 柳家喬太郎

干物箱● 春風亭柳橋

《仲入》

花見酒● 春風亭一之輔

寝床● 立川龍志

三味線 太田園子　松尾あさ子　笛 春風亭一花

太鼓 柳亭市童

前座 柳亭市遼

新・落語掌事典（二四九）　田中優子

●喜撰（恪気の独楽）

この上方落語には『喜撰』や『喜撰小僧』等の別名がある。これらでは、丁稚の定吉が本妻に問い詰められる場面に音曲を使った。上方から『恪気の独楽』前半を明治になって三代目・柳家小さんが東京に移し、四代目・古今亭志ん生が改作したようだが正確には確認できない。喜撰とは平安時代の六歌仙の中の一人喜撰法師のことで、それを題材にした清元節と長唄の掛け合いによる舞踏劇（所作事）五変化『六歌仙容彩（ろっかせんすがたのいろどり）』の、四番目の曲を指している。茶汲み女のお梶（小野小町）に見とれた喜撰法師が茶碗を落とし、二人で口説きの踊りを始める。最後は大勢のお迎え坊主が出て住吉踊りとなり、そこで詠われるのが「世辞で丸めて浮気でこねて…」である。八代目春風亭柳枝は父親が音曲師だったからか、この演目が得意だったようだ。

●江戸時代の喫煙道具（普段の袴）

喫煙が広く民衆に受け入れられ、喫煙道具を含めた一大文化にまで発展したのは江戸時代である。噺の中で、侍が骨董屋で喫煙をする際に、詳細に喫煙道具を描写する場面がそれを物語っている。江戸時代の喫煙道具の代表はキセルであろう。キセルはポルトガル船の乗組員によってもたらされ、カンボジア語でパイプを意味するクシェルが語源だ。日本人は外来物を日本化させるのが得意だった。初期のキセルは70㎝を超える長さだったが「細刻みたばこ」の登場によって、大きな火皿と短い筒のキセルへと変化した。こうして携帯できるようになったキセルは、アクセサリーとしての性格も加わって根付けと緒締を付随した革や布のタバコ入れと共に持ち歩くものとなり、趣向を凝らすことのできる道具となった。屋内では火入れ、灰落し、キセル置き等をまとめた「たばこ盆」が登場した。

●亀清と柳橋（干物箱）

神田川が隅田川に合流する手前の橋と、橋の北側一帯の地名を柳橋という。この演目にはその柳橋にあった料亭・亀清楼が出てくることがある。一六五七年の明暦の大火が江戸市中の大部分を焼いた。現在の人形町にあった元吉原も消失し、新吉原として浅草へ移転した。

（裏面へつづく）